

● 新入会員 ●

—8月分—

地区会員 1社(1口)

三栄源エフ・エフ・アイ(株)(1)(関西支部)

[事業内容] 食品添加物の製造・販売

書 評

森林循環経済

(一社) プラチナ構想ネットワーク会長 小宮山 宏 編著
A5判 176ページ 定価1,980円
平凡社 2025年8月5日発行

東京大学総長を務めた小宮山宏氏が現在会長を務めるプラチナ構想ネットワークは、「森林」「再生可能エネルギー」「健康」「人財」「観光」の各領域で新たな社会の仕組みを提示し、「地球が持続し、豊かで、すべての人の自己実現を可能にするプラチナ社会」の実現をめざす組織である。本書は、その五領域のうち森林に関する構想をまとめたものだ。

著者は、2050年カーボンニュートラルの達成を見据え、そのロードマップの一つとして森林資源のフル活用を提言する。日本は国土の約7割を森林が占めるにもかかわらず、木材の過半を輸入に頼っており、国内の森林を資源として十全に活用していない。この不均衡を改め、資源自給へ舵を切るには、まず国産材の需要を確実に起こすことが不可欠だ——ここが本書の出发点である。供給(林業)を先に増やしても、受け皿がなければ循環は回らない。需要を先に設計し、その需要仕様から逆算して上流を再設計するという順序を、著者は明確に打ち出す。

その需要の受け皿として本書が具体化するのが、バイオマス化学と建築(木造都市)である。前者は化石由来の原料を廃プラスチックなどのリサイクルに加え木質バイオマスへ置換し排出を削減する。後者は中低層を中心に木造・木質化を進め、都市空間にCO₂を長期固定する。需要を先に設計し、そこから上流(森林・林業)を逆算する——この順序が本書の肝要である。

さらに、安定供給と吸収源の維持・更新のためには再造林が欠かせない。「伐って、使って、植えて、育てる」という人の手による循環を社会に根づかせることが、未活用の現実と脱炭素の要請を同時に乗り越える条件になるというのだ。

ここまでの本書の第1章で語られる全体のコンセプトであり、以降は「バイオマス化学」「建築(木造都市)」「林業」の各論が展開される。バイオマス化学の章では、木質バイオマスとは何か、どのように生成されるのかといったことを解説するとともに、木質バイオマスの実証事例も豊富に紹介されている。製紙技術を応用してバイオプラスチックを作り出そうとしている王子ホー

ルディングス、木質バイオマスによるコンビナート構想を掲げるトクヤマ、カーボンファイバー強化樹脂などの高機能素材への活用が期待される「グリコールリグニン」を開発する森林総研・リグニンラボなど、一般の読者には興味深いものとして受け止められるだろう。

3章の木造都市では、国内外の木造・木質建築の事例とともに、いかにして中高層木造建築が可能になったのか、技術だけでなく制度面についても詳細な解説が行われている。4章の林業では、現在の林業が抱える諸問題を整理するとともに、需要の増加とそれにこたえるための供給体制をいかに築くか、そのプランを提示。年間10万m³の木材を供給する中規模の集積所「ストックヤード」を全国に展開していくという案は興味深いものがある。

そして最後には、京都大学大学院農学研究科教授の立花 敏氏と小宮山氏の対談を収録。資源としての森林の活用に関する問題にとどまらず、文化としての森林をどう位置づけるかという視点を差し込み、読者に「誰が何を先に動かすか」を考えさせる締めとなっている。

資源問題からカーボンニュートラル、人と木の関係に至るまで——本書は、一つの分野だけでは解けない課題を、境界を広げて他領域と連携し、産学官が一体で設計し直すことを促す。技術はすでにあるのに実装が進まない。その壁を破る鍵は、境界を外へ延ばす意思と設計だ。本書はその第一歩を後押ししてくれるかもしれない。

(プラチナ森林産業イニシアティブ 鎌形太郎)

